

ヴァレリーのデカルトとテスト氏について

山 本 省

I 序

「ジェノヴァの危機」のあとヴァレリーが創造したテスト氏は、ヴァレリー自身「テスト氏は私のおどしである。かしこくなると私はテスト氏のことを考える」⁽¹⁾と書いていることから推察できるように、それ以降の彼の生活を支配する。『テスト氏との一夜』に「デカルトの生は最も単純である」⁽²⁾というエピグラフを書き入れたヴァレリーが、考えるものとしてのデカルトに心から共感を抱いていたのは事実である。彼は1894年のジッドあての手紙で知的自伝を書くことの意義を強調している。「午後『方法叙説』を再読した。能う限りの現代小説だ。それ以後の哲学が哲学における自伝的部分を除去してしまったことは注目すべきことである。だが、それこそ再度取り上げるべき点であり、情熱の生涯ばかりが書かれている現代にあっては、是非理論による生涯を書かねばならない。」⁽³⁾レオナルド・ダ・ヴィンチ論に比すべき全面的なデカルト論が書かれるのはずっと後のことではあるが、『テスト氏との一夜』の冒頭にデカルトの生活の単純明解さを称える文句を掲げるのにはそれなりの象徴的意義があると考えざるをえない。従来ヴァレリーがカルテジアンであるということは広く認められてきたことであり、ある評家は「デカルトのヴァレリーへの影響はいくら誇張しても、しすぎるということはないだろう。エゴチスム、すなわち自我意識はヴァレリー自身の方法、つまり彼の思考方法であると同時に彼の批評方法でもある」⁽⁴⁾と、デカルトの影響がとりわけ根本的であるということを力説している。「危機」脱出のさいのボーの影響、さらに普遍的思考をめざし厳密を自らの信条としたレオナルドへの傾倒を否定するわけではないが、テスト氏の中にデカルトを読み取ることができるということから、われわれは、デカルトが、彼ら以上に、ヴァレリーの一生涯にわたって影響力を持っていた、あるいはヴァレリーはデカルトを生涯心の友とした、と考えたい。そのデカルトに関して、青年時に共感の一端を示しながらも彼は何も書かず、1925年と1926年の二つの短い文章のあと、ようやく1937、1941、1943年とまさにヴァレリー再晩年にいたり主要なデカルト論を書いている。⁽⁵⁾

われわれは『テスト氏』を一種のデカルト論と考える。『テスト氏との一夜』執筆当時にもデカルトは意識されていたであろうが、後年バイエの『デカルト伝』を読み、年令的にもデカルトの生活を概観できる立場になり、またデカルトの知的啓示と自らの知的啓示の相似に気づき、いわば時間をさかのぼって、ヴァレリーはデカルトにより一層の愛着をおぼえるようになっていく。かくして、レオナルドを先輩とする、考えることが生活のすべてであるような存在としてのテスト氏とデカルトとの関係が密になり、彼らはヴァレリーの偶像となる。われわれはヴァレリーのテスト氏が、後に発表されるデカルト論にみられるヴァレリーのデカルトとどのような関係を有しているかを検討することによって、ヴァレリーがジッド

に強調した知的生活の自伝とは『テスト氏』とデカルト論にほかならず、またヴァレリーの想像する彼独自のデカルトは万人に内在する純粹自我そのものであり、つまるところテスト氏でもある、という事情を明らかにしていきたい。ヴァレリーは巧みにデカルトを自らの血肉と化し、テスト氏の生とデカルト的生を自らの内で融合させるにいたるのである。

テスト氏のモデルとしては、デカルトのほかドガやマラルメが挙げられるであろう。ドガについては、確かに、ヴァレリーが『テスト氏との一夜』の献呈を数回申し出、いずれも断わられたという事実⁽⁶⁾からみて、ドガの性格や彼独特の芸術論がヴァレリーの参考になったのは肯ずけるが、いずれにしるドガは後年ヴァレリーが親しく付き合うようになる人物であり、考えるものの表現というよりも考えるもののもつ諸属性の観察記録ともいべき『ドガ・ダンス・デッサン』のモデルとしての方がふさわしく思われる。マラルメについての著作もマラルメという人間、つまり彼の体温をそのまま伝えようという意図のもとに書かれた。この点で、歴史的レオナルドではなく、ヴァレリーのレオナルドが問題となっていたレオナルド・ダ・ヴィンチに関する作品とは趣きを異にしている。ドガ、マラルメ論においては彼らに関する歴史的事実が重視されているのである。先ず批評対象になっている芸術家の創造行為発生の源までさかのぼり、その後にはじめてその創造行為を、ヴァレリーの自我意識をとうして解明しようとする彼の批評の方法が変ることはないが、できる限りありのままのドガ像、マラルメ像の確立が目指されている。

Ⅱ ヴァレリーのデカルト観

(1) 青年ヴァレリーが精神的危機にあって最大の力を汲みとったのはポーからであるという考え⁽⁷⁾にわれわれは賛成であるが、ポーについて彼は次のように書いている。「ポーの体系においては一貫性が発見の方法であると同時に発見そのものである。それは見事な構想であり、適合の相関性を見本であり、またその作品化でもある。すなわち、宇宙の構造の根本に認められる均斉は何らかの形でわれわれの精神の奥深くにも存在している。かくして詩的な本能はわれわれをまっすぐ真理に導いていくであろう。」(I, 857)⁽⁸⁾ 人間に関することなら何でも解釈しうるはずの法則を掌中に収めているというポーの自負は、彼の暗号解読の嗜好などにうかがうことができるが、デカルトはより科学的に——というのは神秘主義的色彩が薄いということであるが——、哲学とは一人の人間が構築すべきものであると判断する。その哲学が仮に数式のような客観的な形式で表現されうるならば、それは万人に利用可能となるであろう。「その都度要求される努力を減らし、個々の問題にそれぞれ特別な解決を考え出さねばならないという負担の代りに、すべての問題に通ずる取り扱い（それは時として一種の自動装置となる）を採用しようという意図は、デカルトにおいては基本的な考えである。またその意図こそ方法というものの本質である。その意図は、天才の必要度を減らし思考の並外れた節約を実現するために、人間がその天才を応用してかつて獲得したうちで最も見事な成功を、彼の幾何学をとうして収めている。一つの方法を追究するということは、精神の仕事に精神よりも巧みに行ないうると、客観化可能の操作の体系を追究することである。そしてそれは、機械仕掛によって得られるもの、あるいは得られるだろうと考えられるものに近づくことでもある。すぐさま計算し総和をつくることのできる、驚異的な機械はすべて、

このデカルトの創意と意図から直接生み出されたものである。」(I, 800-801) デカルトは数学における「推理の確実性と明証性」⁹⁾を高く評価していたが、同時に、数学がただ機械的技術的なことにしか応用されていないのを残念に思っていた。後に彼はこの数学の方法を哲学に応用しようと試みる。つまり、「認識の領域にあるすべてのものに対して、あらゆる問題を知的空間に固有の一種の図形に変えうるような、一様で方法的な取り扱い方を考え出し適用すること——それは、線と数との間の対応関係の発見があらゆる曲線を幾何学的空間に固有の性質に変えるのと同じことであるが——、それがデカルトの全思索生活を息づかせている。」(I, 822) 三段論法や詭弁ではなく、あらかじめ自分で頑丈に築いた土台の上で推論することを彼は目指した。

(2) 「多くの部分から成り、多くの親方たちの手で作られた作品には、ただ一人の親方が仕上げた作品におけるほどの完璧さは見られない」¹⁰⁾といったごく日常的なことから思索を開始するデカルトは、学問も建物や町と同じく、一人で計画的に構築する時最も均斉のとれたものとなるという認識に達し、「ただ孤り暗闇を歩む者のように、ゆっくり進もう、すべてに細心の注意を払おう、そうすればたとえ少ししか前進しなくても、少なくとも倒れることだけは避けられるであろう」¹¹⁾という結論を得た。神学者や哲学者たちの高説を拒否して、たった一人で歩み始めるにはそれなりの自負が必要である。「われ考える、故にわれ在り」にヴァレリーはデカルトの強烈な自我意識を読みとる。デカルトに関する比較的長い二つの作品『デカルト』と『デカルト考』はいずれも、デカルトの自我意識をめぐる見解——しかも両者とも内容はほぼ同じである——でしめくくられている。ヴァレリーはある種の確信に達している場合、過去に発表した自分の文章をそのまま転載することが時折ある¹²⁾が、今われわれが検討しようとしているデカルトに関する作品においても同一の表現はしばしば用いられている。『デカルト』において、デカルトの自我意識という核心へヴァレリーは次のように接近していく。

私はデカルトのどういうところに感心しているのかと自問する。というのも、まさにそうした点こそ今もなお生命を持ちうるし、また是非生かしておかねばならないからである。それが彼の作品を読む私を私自身へ、私の問題へと押し返し、つまり彼の作品に私の生命そのものをかよわせるのである。しかし、私がそうして再生させるものは、実は、デカルトの形而上学ではない。それは彼の方法でもない。少くとも彼が『叙説』で述べているような方法ではない。

彼において私を魅了し、私にとって彼を生命ある者にしているのは、彼の自我の意識であり、彼の注意力の中に残りなく結集されている彼の存在の意識である。それは自らの思考の働きについての透徹した意識であり、きわめて意志的で正確な意識である。デカルトは自我を一つの道具、その無謬性が彼の自我意識にのみかかっているような道具と化す。

(I, 804-805)

かの有名な「コギト」に関してヴァレリーはきわめて特異な解釈を試みる。『方法叙説』の中でデカルトが主張し、また後世の多くの人々が喧伝してきた方法にではなく、ヴァレリーは、『叙説』中の「私」の多用が伝えてくるデカルト自身の肉声の響きに魅力を感じる。デカルトがどのように思索生活を送ったか、という点にヴァレリーの関心は向かう。世間の人

々に生活を乱されまいとして、デカルトは社会的には可能な限り穏健に生きようとした。その結果が「コギト」にも反映されており、そこにヴァレリーは一種の弱さを読みとろうとする。つまり、それは自分自身のための思考ではなく、そこには世間の要請への返答が混じっているというのである。「デカルトの受けた教育、彼の育った環境、申し分なく完璧で、すべての問いに答える義務をもつ哲学者と見られたいという配慮などに屈して、私見によると、デカルトの意志は、彼の真の本性にとっては随分外的で無縁だと思われるこれら二次的な諸要請を満足させるために努力したのである。」(I, 805) これはヴァレリーがデカルトに対して発しうる数少ない非難であり、例えば、名声を弱さとみなす『テスト氏との一夜』の語り手の次の言葉を下敷にしている。「人々が優れた人物と名付けているのは、自分を誤っている人間である。その人物に驚くためには、彼を見なければならぬ。見られるためには、その人物は姿を現わさねばならぬ。つまり、名声という馬鹿げた執念が彼にとりついている。かくして、大人物はすべて誤謬のしみをつけている。力強く見えるような精神はすべて、人に知られるという誤謬を出発点としている。」(II, 15-16) この誤謬とは、テスト氏からみると、デカルトがためらいながらにはあるが著作を世に問うたということにある。デカルトが書物を出版せざるをえなくなった経緯は『叙説』第六部に詳述されているが、彼は自分の生きているうちに著作を公表すべきではないと一時考えていた。考えるものであるデカルトが考えるもの以外のデカルトと、いかに共存するかという問題が、事実、デカルトの多くの時間を奪ったのであった。だが、ヴァレリーは自分があまりにもテスト氏的な判断によってデカルトの精神を曲解しているのではないかと自問する。「私は確かに間違っていると思う。どう考えても私は間違っているようだ。しかし、私は自分の感覚が導き出す考えを採らざるをえないのである。」(I, 805) ヴァレリーはデカルトの与える印象に従う。

デカルトの『方法叙説』の注目すべき特徴として、その自伝的要素の要求する「私」の多用を指摘した後、ヴァレリーは、「デカルトの真の方法はエゴチズムと名付けるべきであろう、それは認識の諸目的のために意識を発展させることである。」(I, 806)と断言している。デカルトは「自分が望みもせずまた自分の中に見出しもしないのに背負わされている、あらゆる障害、あらゆる強迫観念あるいは自我に寄生する概念を、自我から払い落す。」(I, 806) デカルトが自らの存在を疑うなどということはありません。自分が存在する可否かという問いは、便宜上考案された方法的ともいえる懐疑でしかない。「コギトに推論はない。それが文字どおりの意味をもつということさえない。あるのは力のひと突きであり、知性の反射行動であり、生きそして考え、次のように叫ぶ存在である。もうたくさんだ。あなたがたのいう疑いは私自身の中には何の根も持っていない。私は何の役にもたたないもう一つの疑いを自分用に作り出し、それを方法的懐疑と名付けよう。それを先ず最初あなたがたの命題に適用することを許して欲しい。あなたがたの問題は私にとっては無意味である。ある哲学によると私は存在し、他の哲学によると私は存在しないことになるが、いずれの場合にも、事物において、私において、私の能力において、私の情念において、何ら変りはないのである…。」(I, 806-807) 「コギト」は既存のあらゆる学説を吹き飛ばし、デカルトの自我意識を高揚させるための宣言である。遅々としてはいるが確実な歩みを続けるデカルトが、敢えて自分は疑っているかのようにふるまうのは、世の哲学の無意味を思い知ってい

るためであり、またそうすることにより彼は、世間の要請に答えながらも、相変らず着実に進行している自分の哲学の有効性を確認しているのである。「コギトはデカルトが自らの自我意識の諸力に集合を命じるラッパの響きのように私には感じられる。デカルトはそれを彼の自我のテーマ、精神の自負と勇気に呼びかけるラッパの響きとして、彼の作品の多くの箇所でも何度も繰り返し取り上げている。この表現の魅力——魔術的な意味での——はこの点にある。その表現は様々に注釈されているが、私はそれを感じとるだけで充分だと考える次第である。」(I, 807) 自然の諸問題、教育的、社会的諸問題の解明を目指してデカルトの自我は歩み始める。『方法叙説』はその行進の記録である。

『デカルト考』も、デカルトの自我意識に対して、少し簡略にはあるが、ほとんど一字一句同じ表現を用いている。

問題は何なのか。何が目標になっているのか。

一個の自我がなしうることを提示し明示することである。では、デカルトの自我は何をしようとしているのか。

彼は自らの限界を全く感じることなく、すべてを作り出そう、すべてを作り直そうとする。だが、先ず古いものを一掃しなければならない。自我から生じたのではないすべてのもの、あるいは自我から生じないであろうものはすべて、単なる言葉にすぎないのである。

他方、自然の問題と私が名付けた問題に関しては、自我はその明晰性を獲得するための戦いの中で、彼が自らの方法と呼び、またすでに幾何学の領域を見事に征服しつつしていくところの、あの張りつめた意識を展開していく。

彼はその方法を非常に広範囲の現象に適用しようとする。彼は全自然を作り直そうとする。彼は自然を理性で把握できるものにしようとして、驚くべき豊かな現象をくりひろげるのである。それは一個の自我にいかにもふさわしいことである。というのも、自我の思考は、現象の多様さに対し、生命の富と形の多彩さに対してさえ、絶対に譲歩しようとはしないのだから。(I, 841)

「半神の黄昏」(I, 842)とでも形容すべきわれわれの時代にあっては、「デカルトの強力な大胆な個性を強調する」(I, 842)のは意味のないことではない。ヴァレリーがデカルトの自我意識を重視するのも、彼自身が半神テスト氏の作者であるということを考え合えると、よく納得できるのである。

きわめて短い『第二デカルト考』は以上の諸観点を要領よくまとめている。先ず、「権威の教えは空しい」(I, 842)と考えるデカルトは「彼以前には伝統の支配する教条という形で扱われてきた事柄を、自分の個人的な仕事とした。」(I, 842) つまり、自我の強調である。第二に、「自分の幾何学者的才能を試して以来、自らの思考の力強さを信ずるようになる」(I, 843) デカルトは、「空間的分析においてこれほど見事で素晴らしい成功を収めた同じ人間と同じ知性の努力とが、物理的世界に、次いで生命の諸問題に挑み、同等の結果を得られないなどということはありえない」(I, 843)と考えるにいたり、その結果、「ひとつの宇宙とひとつの動物とを考察する。」(I, 843) 最後に、ヴァレリーは第一の観点を再度強調する。「人間世界のこの驚くべき変形の起源にあるのは、一個の自我、デカルトの力強い不敵な人格である。彼の哲学よりも、彼が示すあの素晴らしい記念碑的な彼デカルトのイメージの方が、われわれにとっては一層の価値を持つであろう。」(I, 844) なお、これは『デ

カルト考』の末尾の文章とほとんど同一の表現である。

これまで検討してきた三つの著作とは趣を異にする、散文詩的な『オランダからの帰り道』については後に詳述するので、『方法叙説』の序文として書かれた短文『デカルトに関する断章』を一瞥し、この章を閉じることにする。この作品はヴァレリーのデカルト論の中では最も早く、1925年に発表されているが、彼のデカルト観はすでに確立されている。そこでヴァレリーは『方法叙説』を次のように位置づける。

慎重な人間で、最も堅い材料を用いる仕事では比類ない芸術家であったデカルトは、一種の墓、それも羨望に値する墓を自らの手で建立した。彼はそこに自らの精神の像を立てた。それは実に彫りのはっきりした、見るから真に迫る像であって、デカルトが生きていてわれわれに親しく語りかけ、われわれの間には三百年という距たりはなく、われわれは彼と直接交際することが可能で、その上、彼とわれわれとの距たりは、ある精神とその精神の持主との間隔とまではいかなくとも、ある精神と他の精神との間隔ほど大きいものではない、と判断したくなるほどである。その墓碑とはあの『方法叙説』であり、正確に書かれたものがすべてそうであるように、ほとんど不滅である。自負も謙遜も欠けておらず、堂々とした親しみのある言葉が、反省の人ならだれもが備えている意志と、彼らに共通する態度とを非常にはっきりと目立たせているので、その結果、その墓碑は、モデルとよく似ている、あるいはデテルの生き写しであるというよりも、現実¹に生ある存在であり、しかもそれはわれわれの存在を養分として吸い上げているといえるくらいである。(I, 789)

ここに引用した文章はヴァレリーのデカルト観を言い尽してあまりあるが、『テスト氏の作者としてのヴァレリーはデカルトの目論見を次のように考えている。「デカルトの構想は、われわれに彼自身の声を聞かせること、つまり、彼において必然的なモノローグをわれわれに感じ取らせ、彼自身の誓いをわれわれにも誓わせようとするものであった。彼が彼自身のうちに見出したものをわれわれもわれわれ自身のうちに見出すようにしむけること、であった。」(I, 790) このような文章は『テスト氏との一夜』の中にあっても、一向に矛盾を感じさせないであろう。すぐ後で、ヴァレリーはデカルトの思索生活に感嘆の声をあげている。「人間が自らの観念の中で自己を確証し続け、諸事物の中に自己を放ちながら、自己を喪失しないというのは、何という贅沢な自由であろう。何と優雅で放縱な生き方であろう。」(I, 790) 次のようにつぶやくテスト氏に対する「私」の感嘆もこれと同じであろうと思われる。「私は考える、そのことは何の邪魔にもならない。私は独りだ。孤独というものは何とこちよいいものであろうか。」(II, 25)

テスト氏との詳細な比較は次章に譲ることにするが、以上でヴァレリーのデカルト観の根本は明らかになったと思う。とりわけ自我の問題が重視されていたのであった。

Ⅲ テスト氏とデカルトの比較

(1) 『テスト氏との一夜』はヴァレリーの自我を主張した作品であり、ある種のとげとげしさを持っているのに比較すると、デカルトに関する作品には、テスト氏の生活を自ら何年もにわたって体験してきたヴァレリーが、デカルトの生涯をあたかも自分の生涯であるかのように、回顧しているとも形容でき、そこには余裕が感じられる。

ヴァレリーのデカルト像によると、デカルトは宇宙、人間を一種の機械と考え、それを数的関係で表現しようとした。その企てをデカルトが先人たちを否定し自我意識のみを頼りにすることから始めたのと同様、テスト氏は商券取引所に勤め生活費を稼ぐかわら、独自の思索生活を送っている。彼は言う。「本を読まなくなって二十年になる。書類も焼いてしまった。私は生身を削っている…。欲しいものはとっておく。だが、そんなことが難しいんじゃない。本当に難しいのは、明日欲しいものをとっておくことだ…。私は機械的なふるいを探し求めてきたのだ。」(Ⅱ, 17) 「私」は、テスト氏が精神法則を発見しているものと思っている。彼は、『デカルト』の中の表現を利用すると、まさに「天才の必要度を減らし、思考の並外れた節約を実現するために」(Ⅰ, 800)、思考の数量化の努力を続けているのである。

持続というものの精妙な芸術、つまり時間とその配分とその管理——選び抜いたものを特別に養うために時間を消費すること——は、テスト氏の重大な探究の一つであった。彼はいくつかの思考の繰り返しを監視していた。そして、それらに数的な性質を浸透させた。このことは、彼が彼の意識的な研究を機械的に適用するのに役立った。彼はその仕事を要約しようとさえしていた。彼はしばしば「成熟セヨ」と言っていた。(Ⅱ, 17-18)

テスト氏は、ヴァレリーが、一種の知的回心(1892年)において、諸偶像(恋愛、文学、友情)を打ち壊すと同時に生み出した偶像であり、世間的名声を避け純粹思考に没入している、思索的人間にとっては良心の権化ともいえる存在である。だが、テスト氏は知的なもののみを求めているわけではない。確かに、ヴァレリーはテスト氏を純粹精神の象徴としたのではあるが、彼における感性の役割も無視するわけにはいかない。例えば、テスト氏が語る時、聴き手は現実そのもの(詩的現実)にのみこまれていくように感じる(Ⅱ, 18)し、彼がベッドの中で意識と睡眠の境界を漂う時(Ⅱ, 24-25)の注意力の緊張は、知的な作業に、鋭敏な感性の協力があってはじめてなしうることである。だが、感性は事物のなまの状態を把えはするが、感性の一人歩きをヴァレリーは好まない。知性が感性を統御してはじめて真に知性的といえるのである。ともかく、ヴァレリーが感性をも重視していることに変わりはない。「感性はすべてである、すべてに耐え、すべてを発展させる。」¹⁴⁾「すべての根底に感性があり、感性はすべてを生産する。また、感性は各瞬間、というよりむしろ各現在時の総和である。」¹⁵⁾ 感性の重視は『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』にも散見されたが、その傾向が高まるのは、『若きバルク』、『ユーパリノス』などにおいてである。だが、われわれは、感性による諸印象を組み立てていく、ユーパリノスの「夜の間の難解な省察」(Ⅱ, 83)を見落してはならない。要するに、感性は生産し、知性はその生産物を保存、伝達するのである。「俗に知性は感性に対置すべきものと考えられている。だが、知性と感性は、一つの刺激の引き起こす置換操作の二つの型であるにすぎない。感性は生産的であり、知性は保存的である。」¹⁶⁾

デカルトが感性を重視していたことは、かの有名な三つの夢の解釈からも首肯できる。感性的体験というよりも、神秘的体験をデカルトは彼の思索の土台に据えつけようとする。「この内的なプロテウス(デカルト)が厳密から狂気に移り、理性的構築物にいたる道をまっとうできるよう祈りに求め、最も高慢な企てをする彼を支えてくれと神々に願い、さらにきわめて漠然とした夢が彼の明晰な思考体系の好意的な証拠となってくれることを望む。こ

のようなデカルトを見ることほど驚くべきことがあるだろうか。」(I, 817-818)

以上、第一の共通点として、世界、人間に内在するはずの法則の発見とその表現を、テスト氏とデカルトが目指しているということを検討した。知性の働きが要求されるのは当然であるが、感性も休んではおれないのであった。

(2) 次に、デカルトのコギト、ヴァレリーのテスト氏が自我の宣言であったという点を、すでに触れてきたことでもあるが、再確認しておきたい。

デカルトのコギトは世間に対する方法的懐疑にすぎず、その真の意義は自我の高揚にあるとヴァレリーは考えた。その土台には上述の夢がある。ヴァレリーのテスト氏は、ヴァレリーが彼自身に注意力を向け始めた時、つまり、自分自身が外界の諸事情に左右されるのに耐えられなくなった時(II, 11-12)、知性の偶像として生み出された。「私は私が実際に所有している諸特性だけに自分を限定しようとした。私は自らの能力にあまり信を置いておらず、自分の内部に嫌悪に足る点を難なく見出せるのであった。だが、私は、明晰さに対する無限の要求、信念や偶像に対する侮蔑、容易さに対する嫌悪感、自分の限界に対する直感、以上のようなことには自信があった。私は内的な島を自分で作り、それを再認し強化して時を費していた…。テスト氏はこうした状態のま新しい思い出から、ある日誕生した。」(II, 12-13) テスト氏は、ヴァレリーの思考と批評方法の中核に位置し、時とともに変貌していくヴァレリーの諸特性の奥底にある透明な自我である。つまり、テスト氏はヴァレリーの自我意識の中で生れ、そして生き続ける。ヴァレリーのあらゆる意識的活動にテスト氏は関与しているのである。「私は自分を常に正しく判断してきたと思っている。私が私自身から目を離すことはほとんどなかった。私は自分を嫌悪し、また自分を熱愛した。そしてわれわれは共に年老いた。」(II, 15) 引用文中の「私」はヴァレリーの分身である『テスト氏との一夜』の語り手で、「私」の内部のもう一人はテスト氏である。

(3) 真に偉大な人物というものは名声を望まずひっそりと暮しており、世の中にあって木や石と同じ物体とみなされることを望むであろう(II, 16)。「世間周知の歴史を無名の年代記で消し去ることに興じていた」(II, 16)「私」は、何の目的もなくただ考えるために考えていたと形容できるが、そうしたことも念頭から去ろうとしていた矢先、彼はテスト氏に出会う。この出会いは、『テスト氏との一夜』の終りの方の、テスト氏がベッドにもぐり込み自らの意識と無意識の境界を覗きこむ場面ほどには強調されてはいないが、「私」が出会ったテスト氏とは、「私」が上述の偉大な人物たちに思いを馳せていた時、つまり、自らの内なるテスト氏を求めていた時に、「私」の心中から浮き出てきた存在なのである。テスト氏が「浮き身」(II, 24)を楽しむように、「私」もまた自分の無意識の海の中におりていく。「このように単純な操作の結果、私は奇妙な広がりを手にしたが、それはまるで海の底におりて行くような感じであった。公けにされた諸発見の中に埋もれてはいるが、商取引、恐怖、倦怠、貧困などに日毎脅やかされている無名の諸発明のかたわらに、私は精神的な諸傑作を見分けるものと考えていた。」(II, 16)

以後展開される「私」とうしてのテスト氏の物語は、日常的次元に還元されてはいるが、元来「私」の心の内部の出来事である。読者が「私」の心中の深みに入っていくことを要求

されているともいえるであろう。ともかく、テスト氏は「私」の仲介によって読者に伝えられる。

ある人間がいかにして世間に知られるようになるかという点に注意を払うヴァレリーは、デカルトを語るにあたって、二度、メルセヌ神父の役割を強調している。先ず、『デカルト考』において。「メルセヌはデカルトにとって、最も誠実で有益な友であり、デカルトの話の聴き手、保護者、情報係、通信係というきわめて貴重な役割を果たしていた。この種の人物は大人物たちのかたわらによく見出されるものである。だが、メルセヌ神父は、おそらく、それら天才の侍者たちのうちでも最高の地位を与えられるであろう。」(I, 812) このような考え方は、たとえば、『テスト氏との一夜』の中の、次のような箇所と最もよく符合する。「最も力強い頭脳、最も鋭敏な発明家、思想の最も正確な認識者とは、無名人、客嚮家、自分の思想を他人に打ち明けることなく死んでいくような人間であろう、と私は夢想していた。彼らの存在は、彼らより少し脆弱な人間によって私に伝達されたのであった。」(II, 16)

『デカルトに関する断章』の中で、ヴァレリーは再度メルセヌに言及し、彼についての研究を奨励している。「デカルトの竹馬の友、誠実で時にはおせっかいのすぎる友であり、デカルトの学説の伝播者であるメルセヌは、偉大な人物の成長や大事件の勃発にあたって、おそらく本質的な役割を演じている、あの二流の人物たちのうちで、最も愛すべき人物である。天才のかたわらに、また大事件を惹き起こす小さくはあるが生きた原因の中にいつも見出される、このような助手、世話人、聴き役、仲介者たちを、歴史の中から系統的に選び調査すれば、かなり新鮮で、また実り多いとさえ考えられる研究となるであろう。」(I, 787-788) 絶えず緊張を要求する対等の友人よりも、侍者の方が偉大な人物の周りでは存在しやすい、とりわけ偉大な人物の晩年にあってはそうだと後年ヴァレリーは記している。「友情という大きなテーマ。(中略)デカルトとメルセヌ。人間が偉大になり年をとると、対等の友人に代って、影のような、彼より劣った人間が現われる。ゲーテ-シーラーという図式に、ゲーテ-エツカーマンという図式が続く。心を打ち明けられる召使い…。」¹⁰⁹

以上、デカルトとテスト氏が考えるものあるいは純粹精神として存在し、しかもわれわれにその存在を知られるには、有能な仲介者を必要とするという点を検討した。

(4) 次に、外貌に関することで、あるいは些事とみなしうるかもしれないが、ヴァレリーが、デカルトにおいて指摘し、またテスト氏にも与えている外貌は当然彼らの思想に関係ある、とわれわれは考える。それは両者の武人的性格である。

テスト氏はよけいなことは一切しゃべらない毅然たる人物として紹介される。「テスト氏は四十才くらいだっただろう。彼はきわめて早口で、その声は低くこもっていた。すべてが彼にあっては目立たなかった、目も手も。だが、彼の肩は軍人風で、彼の歩きぶりはびっくりするほど規則正しかった。彼は話す時腕や指を持ち上げたりしなかった。彼は操り人形など殺してしまっていたのだ。」(II, 17) 劇場を出、通りを歩いている時の描写にも、同じ単語「軍人の」(militaire) が用いられている。「彼(テスト氏)の軍人風の歩調に私の歩調は従った…。」(II, 22) さらに、彼の部屋は精神と肉体が居住するのに最低限必要なものだけが備えつけられている。「それは、定理における任意の一点に類似した、そしてまたそれと同じくらい有効な、任意の住居であった。その住人(テスト氏)は最も一般的なものの内に

住んでいた。私は、彼がその脇掛椅子に坐って過ごす時間に思いを馳せた。そして、その純粹でありきたりの場所で経験しうる無限の悲しみに恐怖を抱いた。私もまたそのような部屋に住んだことはあるが、恐怖の念なしに、それを一生の住居だと考えることはできなかった。」(Ⅱ, 23) 生命の危険に絶えずさらされているため、戦闘に必要なものの以外はすべて付屬的でしかない兵士もまた、このような部屋に住みうるであろう。テスト氏にとって、彼が全未来を賭けている思索生活は一種の戦闘であると形容することもできるのである。

バイエによると、パリにおけるデカルトの身なりと住居は、当然、質素なものであった。「彼の住居では、一見したところすべてがありがたりの様子であった。家具とテーブルはきちりしており、よけいなものは何もなくあった。彼は少数の召使いに付き添われるだけにし、供の者たちは連れずに街を歩いた。当時の流行に従って、緑色の質素なタフタ織を身にまとい、羽飾りと剣を、貴族の印しとしてのみ、身につけていた。当時、貴族たる者がそれらを身につけずに自由に外出することは不可能であったからである。」^[10] さらに、オランダでの暮らし振りについては次のように書かれている。「彼は、多数の人々に取り囲まれていても、砂漠の真只中にいるのと同じくらい容易に孤独を保持できると自負していたが、やはり大都會の中心を避けてその郊外に住むのを好んでいた。」^[11] 幼少時は病弱であったにもかかわらず、自分で自らの心身を管理し、孤独で質素な生活を望んだデカルトには、常に断固とした武人の面影がある。ヴァレリーによると、デカルトは後悔の念なしに学校を去り、書物を棄て、世の中に乗り出していった。彼は「馬術と、とりわけ剣術に没頭し、剣術にはきわめて熱心なあまり小論文を書くにいたった。父はデカルトを軍職に就かせようと考えていたが、先ず上流社会を見物させようと思い、デカルトをパリに行かせる。」(Ⅰ, 812) 遊び人の社会とも交った後、デカルトは軍隊に入る。再度バイエによると、「デカルトは当時実際に戦争が好きであったと証言している。しかし、この好みは肝臓の熱の作用によるものであり、時がたち、熱が下るとともに彼の好みも消えていった。」^[12] 軍職にあっても彼が思索を中断することとはなかった。「軍職にあっても——そこでは、彼は最も熱心な兵士の精励さでもって勤めていた——、また軍職の合間にあっても——その間、他の兵士たちは放蕩に耽っていた——、彼はいつでも、無為と放縱の大敵として振舞っていた。」^[13] 肉体の戦闘の合間に精神の戦闘が戦われていたのである。(デカルト自身、真理の探究を戦闘にたとえている。^[14]) そして、デカルトは知的回心を体験する。「戦闘にうつるまでに数カ月がたった。待期と交渉とのこの期間中に、デカルトの内部で精神による驚異的な仕事が成し遂げられ、数週間のうちに、この若き武人は、この上なく大胆でしかも最も力強く遂行された知的革命の創始者となる。1619年の後半と1920年の最初の数カ月は、思想界における一つの画期的な時期とみなすべきである。」(Ⅰ, 813) この回心によりデカルトは自らの哲学を打ち建てる決心をする。見聞を広めるため、旅行をしたりして数年をすごしたあと、1628年オランダに移住する。

本質的な仕事に全力を投じなければならない精神は、様々な世間的義務から解放され、また各種の権威のため、最も浮世離れした冥想的な人でさえ免れることのできない心配や不安から、安全に守られていることが必要である。そこでデカルトは、他人に対しては慎重、控え目な態度、隠遁、さらには不信を生活信条とする。自分自身に対しては、世俗的なものの断念を勧め、欲望を禁じる。思索以外自由にできることは何もないと自らを納得させようとする。結局、彼はオランダ語が分らないのにオランダに行って住む決心をする。

そこでは、商売に没頭し、「他人のことに関心を示すより自分のことで頭が一杯の」人々の中で、彼は自らが望んで結ぶ関係しか持たないであろう。(I, 823)

テスト氏とデカルトの軍人のような外貌は、彼らの内的戦闘（精神的探究）を象徴するものである、ということが以上で明らかになったと思う。⁸⁴

(5) これまで、ヴァレリーのデカルトとテスト氏の様々な共通点を検討してきたが、今度は、『方法叙説』に読みとることのできるわれわれのデカルトと、ヴァレリーの、文章を書くにあたっての態度を比較してみる。

「私（デカルト）の意図は各人が自らの理性をよく導くために採るべき方法をここで教えることにはなく、ただどういう風にして私が自分の理性を導こうと努めてきたかを示すことにある。」⁸⁵ デカルトは彼自身の理性の導き方を語ることで満足する。謙遜が全面に押し出されてはいるが、自分の哲学を自分で作り上げるとはどういうことを意味するのかということ、デカルトの説明をもとに考える時、われわれは上の文章にデカルト独自の自我の主張を読みとらざるをえない。そこには自負と謙遜とがこめられているのである。「私は、この書物を一つの歴史として、あるいはお望みなら一つの寓話として提供するだけである。その中には見習うことのできるいくつかの模範とともに、従わない方がよいと思われるそれ以外の沢山の例もおそらく見出されるであろうから、私は、この書物が、ある人々には有益で、しかも誰にとっても有害ではないということ、また、すべての人々に私の卒直な態度を満足に思ってもらえることを、希望している。」⁸⁶ 読者が作者（登場人物）の立場になって読むことのできる物語として受け取られることをデカルトは望んでいる。そのためにフランス語で書いた。専門の学者よりも良識を持った普通の人々に語りかけようとするデカルトの態度は、『方法叙説』と同じく一つの物語である『テスト氏と一夜』における、テスト氏をかなり描象的に描写するヴァレリーの態度とは、少し違っているように思われる。その間の事情については、デカルトがまさに一からやり始めているのに対して、ヴァレリーはマラルメたち先人の開拓した精神的土壌を基盤にしているということを考慮に入れなければなるまい。

『方法叙説』はデカルトの精神的自伝であり、デカルトは生立ちから始めて、彼が歩むべき方向を決め、そして『方法叙説』発表にいたるまでの経緯を、形而上学や医学に関する見解を混じえて、淡々と語っていく。一度は彼の生きている間書物は一切公表しないと決心していたながら、その場合に世間が彼について抱きうる様々な思惑から彼がこうむる不利益を避けるため、最終的には、すでに書いていた諸論文と、彼自身のそれまでの行動を説明するための『方法叙説』を公表するにいたるのである。ためらいや不安にとらえられながらも、結局は断固たる決意を示すデカルトの姿がありありと読者の心中に思い描かれ、そのことが、終始一貫して著者デカルトの「私」の物語であるこの作品を魅力あるものにしている。あらゆる事物は自我を通過してはじめて何らかの意味を帯びるというのがヴァレリーのごく基本的な考えであり、彼が、自我を全面に強調しながらも節度を失うことのないデカルトの文章に共感するのも、当然といえるのである。「じかに声のきこえてくるように思われるこの著者（デカルト）は、自らの追憶と希望から直接でてきた声を、純化し、念入りに表現し、時折非常に明瞭に発音するにとどめたようだ。彼の採った声は、先ずわれわれ自身のあらゆる思考を伝えるが、次いでわれわれがその声に注意を向けると沈黙してしまうのである。」(I,

789) デカルトは巧みにわれわれを彼の思考の中に誘い込み、われわれが彼の思考と置いていたものをわれわれの思考にしてしまう。つまり、われわれもまたデカルト流に考える習慣を身につけるように、デカルトは仕向けるのである。

デカルトのこの表現方法こそ、ヴァレリーが『テスト氏』で用いたものである。ヴァレリーの内なる「私」、「私」の内なるテスト氏といった具合に、限りなく投影されていくテスト氏の像がわれわれ読者の心中にも生れてくる。テスト氏と話している時、「私」はテスト氏の言葉が喚起する情景にひきこまれ、ついには、テスト氏の声を自分の声と区別できないような状態になる。「われわれは事物に交って彼（テスト氏）の思考の中にいるように感じた。遠くに押しやられ、家々や、空間の広がりや、通りに揺れ動く色合や、曲り角などに溶け込んでしまうような感じだった。そして、人の心をこの上なく精妙に感動させる言葉——その言葉はそれを口にした人を、他の誰にもましてわれわれの近くに感じさせ、精神と精神の間に介在する永遠の壁をなくしてしまうのであるが——、そういう言葉を、彼は発することができたのであった。」(Ⅱ, 18) テスト氏に思いをめぐらすことは、われわれの内面にテスト氏が存在しているということである、とヴァレリーは後に『序文』で付け加えている。「何故、テスト氏は可能なのか。この問題がテスト氏の魂である。それがあなたをテスト氏に変える。というも、テスト氏とは可能性の魔以外の何者でもないのだから。」(Ⅱ, 14) デカルトのように生立ちから始めるのではなく、ヴァレリーは意図的に、テスト氏が抽象的思考に専念するようになる過程は省略し、それについては「私」の簡単な説明（冒頭の「私は自分の愚かさをうまく扱えない」以下の、テスト氏と出会うまでの「私」の状況の説明）に止めている。もしすでにデカルトが実行しているの でなかったならば、ヴァレリーも自分の生立ちから開始し、自らの「危機」と知的回心を回想してもよかったのである。その意味で、次の記述には、デカルトに対する全面的な親しみがあふれ出ている。

そこでデカルトは、彼の作品の冒頭の部分を使ってわれわれを彼に似た者に思わせ、われわれに彼の経歴に対する興味を気軽に持たせ、彼の青年時代の反抗へとわれわれを難なく誘い込む。というも、彼はわれわれ自身の青春、われわれ自身の反抗、われわれ自身の尊大な判断を語っているのである。大した価値もなく、ほとんど無駄であったと彼の判断する学校での勉強（事実、自分が見出したのではないようなものは利用することのできない人間にとっては、学校の勉強はほとんど無駄でしかない）を終えた後、彼はヨーロッパ中あちこちと歩きまわり、数々の旅行や、気の向くままに参加したと考えられる当時の戦争の様々の行軍において、自分の心を洗っている。書物は軍隊生活には邪魔だから、彼は何の苦もなく書物なしですませる。彼は数学を勉強する。数学は一本のペンがあれば充分で、どこでも、いつでも、われわれの頭脳が持続する限り 開拓できる 技術である。

(Ⅰ, 790)

これは、考える人間すべてにはほぼあてはまることであろうが、何よりもヴァレリー自身の自伝である。学校では平凡な生徒、学生でしかなかったヴァレリーが、学校教育に限界を感じたのは当然だが、彼はかつて苦手だった数学を、「危機」の後、独力で学び始めるとともに、自分自身の思索を書き蓄えていくのである。こうした事実からみても、上に引用したデカルト伝の概観の試みの一部分から、デカルトの伝記に託して自らの過去をヴァレリーが追体験しているのが、われわれには感じられる。

つまり、われわれは、ヴァレリーのデカルト論と、テスト氏に関する文章を加えることによって、ヴァレリーの知的自伝の全体像をつかむことができるのである。

Ⅳ 『オランダからの帰り道』と『友人の手紙』

(1) 「私」はテスト氏の言葉が表現する光景に吸い寄せられる。その言葉はあらかじめ磨き上げられており、伝達手段としての言葉の次元を越えた詩であるともいえる。「時として、彼(テスト氏)の言葉が一切の意味を失い、ぴったりと表現する用語がいまだになく、言語によっては予測もされないような、ある空隙を満たしているように思われた。私は、彼が一群の抽象的な単語あるいは固有名詞によって、ある物体を指し示しているのを聞いたことがある。」(Ⅱ, 19) 詩と散文を比較する時のヴァレリーの形式化した表現をここで想起しておきたい。散文が目標をもっている歩行にたとえられるのに対して、詩は動くことそれ自体が目標である舞踊にたとえられる。散文は目標が達成されると役目は終るが、詩にとって目に見える目標はない。「詩篇は存在を終えたからといって消失するものではない。詩篇は自分の亡骸から再び生れ、今まであった状態を無限に取り戻すように、意図的に作られている。詩は、自らの形式の中で再生産しようとする特徴により、詩と認められる。つまり、詩はわれわれにも詩を再創造するよう刺激するのである。」(Ⅰ, 1331)

すでにこれまで引用検討してきたヴァレリーのデカルトに関する作品のうち、『オランダからの帰り道』(1926年)だけは他の四作品とは雰囲気と異なる、一種の散文詩的な作品である。デカルトが群衆の中であって孤独な思索に耽った土地オランダを訪問したヴァレリーが、そこでの見聞を終え、列車に乗り込み、フランスに帰る旅の途中の回想記である。ヴァレリーはここではデカルトの自我を主張することはない。彼はデカルトの自我が体験したであろうと想像されうることを自ら追体験していくのである。目標は何もなく、車中におけるヴァレリーの夢がいかにデカルト的になりうるか、ということがすべてである。列車の中という設定がすでに時間的・空間的に中性的な雰囲気をもたらし、いかにも観念が自由に飛び交うにふさわしい。「私はオランダをあとにする…。突如として時が始まるように思われる。時が列車に乗って動き始める。列車は時の手本となる。列車は時の厳格さを身につけ、時の力を受け入れる。列車は、視野に入ってくるすべてをむさぼり食い、精神的なものをすべてを動揺させ、自らの塊でもってこの世の形態に荒々しく攻撃を加え、藪や家や田舎を追い払う。木々を倒し、鉄橋を貫き、電柱を追いやり、運河であれ畑の畝であれ道であれ、自分が横切っていくすべての線を乱暴に後へと押しやってしまう。列車は、鉄橋を雷鳴に変え、牛を弾丸に変え、小石の線路を弾道の織物に変えてしまう。」(Ⅰ, 844) 目的地に少しずつ近づいているという意識を抱きつつ、立ち去ってきた土地に思いを馳せる時、ヴァレリーは時間的には過去にさかのぼり、空間的にも列車の中にいるにもかかわらずオランダへと移動する。こうした空想に耽り車中に坐っている人間は、まさにその中を思索が生れては漂流れていく一つの抽象的場になりきった、といえるであろう。考えるものとしてのデカルトの生をヴァレリーは演じている。「魂の過去と現在と近い未来とが、旅人の魂の中で、三つの異なった鏡のように鳴り響き、その三つの鏡のあらゆる組み合わせが実現され、呼応し合い、奇妙に混じり合う。」(Ⅰ, 845) この作品はデカルトをテーマにする変奏の試みである。

(かつて、ヴァレリーはパスカルについての『変奏』を書き、自分の敵としてのパスカル像を築き上げた。)

また、われわれは、『テスト氏』連作中の『友人の手紙』(1924年)において、テスト氏と別れ、列車でパリに向かうテスト氏の友人の、同じく詩的な回想の記録を知っている。列車が走る様子は『オランダからの帰り道』とほとんど類似の表現をとっている。その理由として、両者は同時期に書かれたということが挙げられよう。矢継早にヴァレリーは『テスト氏との一夜』の続篇『友人の手紙』、『テスト夫人・エミリーの手紙』(1924年)、『テスト氏航海日誌』(1925年)、さらにその『序文』(1925年)を発表するが、それ以後は死後発表のいずれもきわめて短い断辺が書かれたにすぎない。その代り、晩年になり、デカルトに関する心情あふれる作品が書かれるようになる。1925年頃を境にして、ヴァレリー内部においてテスト氏とデカルトがほぼ一体化し、テスト氏がヴァレリーの精神を支配する偶像であることに変わりはないが、すでに多くを書いてきたテスト氏からデカルトへとヴァレリーの関心が移っていった、とわれわれは考えたい。年令的にも自らの生活を振り返れるような状態に達したヴァレリーが、デカルトを語ることによって、自らの姿(それはテスト氏の姿でもある)を再現しようとした、というのはありうることである。

列車は相変らず走り続けていた。ポプラ、雌牛、納屋、地上のあらゆるものを凶暴に投げ棄てながら、まるで喉が乾いてるようであり、また、まるで純粹思考あるいはどこかの星をめがけて走っているかのようであった。いったいどのような至上の目的が、こんなに荒々しく乗客を運び去り、風景を烈しく投げ棄てさせているのだろうか!

われわれは雲に接近していった。様々な名前が輝いていた。空は政治や文学の流星で溢れていた。予想外な出会いがパチパチ音をたてていた。穏やかなやつは羊のように、とげとげしいやつは猫のように、太ったやつは牛のように、痩せたやつはライオンのように、鳴きたて吠えたてていた。

様々な党派や流派が、サロンやカフェがざわめいていた。空気が不足すると、エーテルが使い走りの役を引き受けていた。稲妻の剣を打ち合う決闘の音で聾になりそうだった。

数多くののがらくたが、光の速度で世界のはてまで広がっていった。(Ⅱ, 50-51)

テスト氏の友人の精神を支配しているのは、主に、これから到着するはずのパリであり、ここでの彼自身の位置である。走っている列車の光景から、いつの間にか抽象的なパリ風景へと飛躍していく。だが、別れたばかりのテスト氏の雰囲気は消失することはない。『オランダからの帰り道』におけるヴァレリーは、オランダを後にしながらも、なお自分がオランダにいる様子を生き生きと想像できたのと同様に、だが時の方向は反対にだが、テスト氏の友人は、列車の中にいるにもかかわらず、ある瞬間から、自分がもはやパリにいるのをまざまざと感じる。「旅行中、私は自分の魂の期待が変質する様子を観察した。あるバネは弛緩し、あるバネは強く張りつめる。無意識の予測や偶然の驚愕が深いところでその位置を交換する。もしあなた(テスト氏)と明日出会ったりしたら、どんなにびっくりすることだろうか…。パリに着く数時間前、突然私は自分がパリにいると感じた。旅行中は多少消えかかっていたパリっ子気質を、はっきり取り戻したというわけだ。パリっ子気質は思い出になってしまっていたが、それは再び生き生きした価値に、刻々に利用すべき源泉になりつつあった。」(Ⅱ, 47-48) 彼は時間・空間を超越した一個の精神として考えている。われわれが五感の働きに

忠実な時、われわれは人工的に作り上げられた時間・空間の枠外に出る。この時われわれは考えるものとして存在しているといえることができるのである。デカルトは考えるものの体現者であり、ヴァレリーの目指したのもそれであった。

もう一人のテスト氏と考えられるテスト氏の友人や、テスト氏は、デカルトから学ぶところ多く、また彼らは歴史上のデカルトという人物の中に包含されてしまう。デカルトに関する伝記的事実のすべてをテスト氏にテスト氏の属性として与えることも可能なくらいである。デカルトについてのヴァレリーの筆致に何のためらいもなく、心を許し合った旧友との旧交を温めるがごとくである。「私はデカルトを愛する。彼の単純かつ壮大な純粋さ、彼の思想の堅固さ、変ることのない誠実さの印象、彼の歩みにいつもうかがえる秩序のために。」¹⁰ 大胆で誠実なデカルトの思想と生活態度への全面的な信頼が読みとれる。『オランダからの帰り道』にも、ヴァレリーが創造し自分が合一しようと努力している偶像テスト氏が、すでに歴史上デカルトという人物として存在していた、ということに対する感謝とでも形容すべきものがいたるところに満ち溢れている。類似の二作品『オランダからの帰り道』と『友人の手紙』はデカルト賛であるとともに、自分の偶像テスト氏賛でもあり、つまるところ、ヴァレリー自身の自我意識の高揚、再確認のための作品である。

(2) 『オランダからの帰り道』の冒頭でヴァレリーは、列車の旅が空想のための空想にうつってつけであるということから説きおこしていく。「旅とは様々な町々を様々な時刻に対応させる操作である。だが、私にとって、旅の最も美しく最も哲学的な部分は、そうした停車と停車との中間の時間である。心からの鉄道愛好家、つまり、汽車のための汽車の賛同者が存在するかどうか、私は知らない。列車の騒音と力強さ、旅程の長い時間と思いがけないものの出現とを、然るべき方法で楽しむことのできるのは、子供たちだけであろう。子供たちは絶対的な快樂に関しては達人である。しかし、私はどうかというと、客車が動き始めるや否や、神話のまじった素朴な形而上学に心を揺さぶられるのが常である。」(I, 844)「抽象的存在」(I, 845)になったヴァレリーは、デカルトが見たにちがいないものを再現していく。デカルトは群集の真只中にいながら、群集の人にはならず、一人孤立し、しかも無感覚にはならず、そこに動いている人々や事物を冷静に観察していたのである。たとえば次のようなごくありふれた光景でさえ、彼の足を引き止め、彼の思考を刺激したにちがいない、とヴァレリーは考える。

オランダで、デカルトの様々なことを夢想しつつ、私は部屋の窓から、降ったばかりの雪の上を人々が歩いているのを、また、厚い衣服を身につけた船頭たちが、半ば氷が張り半ば破れている白と黒の運河の水の上で、舟を操り、重くて長い舟を、信じられないほど巧みに移動させるのを、見て楽しんでた。それらの舟は時として互いに押し合いへし合いしているので、チェッカーをする時のように取りかからねばならない。よく考えて取りかえねばならない。自分が進もうと思っているところに場所を作り、立退かせる舟のためにも場所を作らねばならない。待期し、押し、舵をとり、やっと狭くて薄暗いトンネルにたどり着くのである。舵取りは、トンネルのアーチの頂上に頭がぶち当たりそうになる瞬間に頭を下げ、モーターの鈍い音とともに舟は姿を消していく。無数のかもめが私の注意を消散させ、空中へと連れ去り、また復活させる。かもめの滑らかなで清らかなからだは、向か

い風にうまく乗り、滑るように進み、目に見えない坂を流れ、バルコニーをかすめ、旋回し、飛行を中断し、大きな氷塊の上に舞い下りる。そして、白い鳥たちは、揺れ動いている汚物と、水中に捨てられている醜い魚の残骸とを、奪い合う。(I, 849-850)

絶対的法則を仕上げる前に暫定的道徳を考え出し、それに従って生活していたデカルトを、自らの進路を獲得するため巧みに舟を操作する船頭の姿を描写することにより、ヴァレリーは想起しているようだ。また、注意力は、何の制限もうけずに、興味の赴くがままにかもめを追って飛翔する。

デカルトとの意識の境界が消え去った状態をヴァレリーは楽しんでいる。だが、一瞬、デカルトはもっと違った人間であったかもしれない、という不安が脳裡をかすめる。「巨匠の霊よ、私の空想に腹をたてないで欲しい！ だれかある人物を愛する場合、私はその人物を私の精神の前に現前させないわけにはいかない。その結果、その人物が彼のありのままとは随分異なった者となってしまうこともありうるのだ。」(I, 850) ヴァレリーはエゴチスムを楯にとる。愛情をうける人間が独特の変形作用をうけるのは不可避である。ヴァレリーは、デカルトがこの著作によって充分には表現し尽していない、生けるデカルトを追体験しているという自負を抱いている。「書物が著者に関してある点では沈黙しており、ある点では事実以上に書き加えているために、その著者の実際の姿を想像しようとする者は、相当大きな自由を委ねられているのである。」(I, 850) デカルトの思想の性格からみて、彼が何よりも興味を抱いたのは運河や堤防に所狭しと置かれている商売道具、つまり「大樽、箱、荷の山、道具類」(I, 850)であったと、ヴァレリーは一層の確信をもって書いている。「測量の君臨するこの商取引の場面ほど、わが知性のリシュリューがその壮大な構想について熟考するのに望ましい情景はなく、またそれに養分を与える環境はない。港においては、すべてが明白に、公然と、容赦なく、計量的である。そこに見られるほとんどすべての活動は、数え、重さを計り、整理し、積み込むといったことに当てられる。そこで数と順序がすべての活動を支配しているのは明らかであり、トンやポンドやボワソーやそれ以外の様々な容積の単位によって数値をつけられないようなものはひとつもない……。」(I, 851)

だが、デカルトは万能ではない。文学は彼の視野の外にあった。ヴァレリーはこの点に関してデカルトから離れていく。デカルトとヴァレリーのレオナルドが対象を分析的に考えるという点では一致しているが、レオナルドの方がより解剖学者、技術家的であるということに二人の相違がある(I, 1258) のと同様に、ヴァレリーは文学を主要なテーマにしているという点でデカルトと訣別する。そして、ヴァレリーは青年の時から持続している、しかし完成の見込みがきわめて望み薄い自らの野心を思い出すことによって、彼自身の自我をはっきりと表現する。「おそらく、私はあまりにも軽率に次のように信じていたようだ(だが、打ち明けて言うと、今でも私はそれを信じている)、文学とは莫大な潜在的資源を、未知とは言えないまでもほとんど注意もされていない組合せや構成の富を、秘めているのだ、と……。それらの資源や富をわれわれが見ることができないのは、相変らず文学の構造についてわれわれが抱いている観念、つまり、今日ほど厳密化が一般的になっているにもかかわらず、奇妙にも曖昧で粗雑な観念のせいである。デカルトはここまで来てくれなかった。この問題では、むしろ昔の人たちの方がわれわれより精緻で科学的だったともいえる。われわれはこの点に関しては神話の段階にいる。」(I, 853) このほとんど解決を望みえない文学の問題

がヴァレリーの問題であり、彼は自負と謙遜をこめて次のように書いている。われわれが日常用いている言葉をそのまま材料とする文学は「きわめて気軽にまた親密に生命そのものと合体してしまうので、文学の秘めている諸能力を形式的に展開できるまでに達することは、不可能ではないまでも、困難である。」(I, 853-854)

デカルトとヴァレリーの違いが明らかにされ——ということは、ヴァレリーのデカルトへの接近方法が意識的であるという証拠でもあるが——、文学におけるラモーやバッハの出現を願いつつ、だがそのような文学の開拓者たちはかつてだれも味わったことのないようなつらい目に遭遇するだろうという予言とともに、この作品は閉じられる。音楽が最初のテーマに戻り終るように、いささか意図的に。「列車はブレーキをかけ、パリの近郊に停車する。そしてフィナーレに向かって静かにまた動きだす…。汽車の旅というものは交響曲にきわめてよく似た作品である。最後に、人々は待ち切れない様子で帽子をかぶり、身仕度をし、立ち上り、通路に出る、というところにいたるまで両者の類似が見られる。」(I, 854)

デカルトを夢想することによって自己を語りながらも、最後にヴァレリーは彼独自の自我のなすべき仕事をはっきりと提示した。自らの自我を意識するほど、デカルト的な行為はなく、デカルト論の結末としてまさにふさわしいと言えるであろう。

V 結 語

これまで『テスト氏』と比較しながら、検討してきたデカルトに対するヴァレリーの接近方法、彼のデカルト観が、次の文章によくあらわれている。

デカルトのコギトそれ自体を分析すべきではない。それはそれだけで完結するような推論ではない。それ自体は何の意味も持っていない。

コギトは壮麗な叫び、劇的な文句、文学的動作、つまり、決定的行為ないしは心理的クーデタである。

コギトは人間と哲学者との接ぎ目、模倣する青春から自分でものを考える大人への移行期を印しづけている。⁸⁸

デカルトの思想そのものではなく、思索したデカルトの生活、懐疑にみちた青春を自我の高らかな叫びでもって乗りきり、沈着かつ大胆な思索活動を持続した、行動の人デカルトにヴァレリーは彼の知的な偶像テスト氏を認めるのである。

青年期にはテスト氏という形でヴァレリーの文学的、思想的理想は表現されたが、1924年、1925年にわたってテスト氏に関する数篇が、それに先立つ沈黙期間の成果として発表された後、テスト氏に関しては断片的な小品がヴァレリーの死後発表されたにすぎない。

テスト氏についての沈黙に呼応するかのように、ヴァレリーの再晩年にいたり、われわれがヴァレリーの肉声を聞く思いのする、デカルトに関する作品が生み出される。二つの時期の継ぎ目になっているのが、『友人の手紙』と『オランダからの帰り道』であり、後者において、ヴァレリーはデカルトの生涯、とりわけオランダでのデカルトの生活に自らのテスト氏の思索を投影している。彼がデカルトになり代りオランダの町を歩き回るのであった。様々な角度から表現しつつされた感のあるテスト氏からデカルトへとヴァレリーの興味の対象は移っていくが、純粋な自我、考えるものとしての自我という中心テーマは一貫しており、

それぞれに関して書かれた作品は、われわれが本論考の冒頭に引用した、ヴァレリーのジッドあての手紙の中で強調されていた知的自伝とも呼びうるであろう。「危機」の後、ヴァレリーはテスト氏を語るることにより、晩年にはデカルトを語るることにより、最も自由に自らの自我を表現できたのであった。

註

- (1) Valéry, *Cahiers*, T.1, C.N.R.S., P.248.
- (2) Cf. A. Baillet, *Préface à La vie de Monsieur Descartes*, réimprimée par Georg Olms Verlag, 1972, T.1, P.XXX. なお, Baillet による原文は「…単純なもの (res)」となっている。
- (3) André Gide-Paul Valéry, *Correspondance*, Gallimard, P.213.
- (4) Maurice Bémol, *Paul Valéry*, Les Belles Lettres, P.111.
- (5) デカルトを主たるテーマにした作品は五種類ある。発表順に挙げておく。末尾のかっこ内の数字は *Œuvres* (Pléiade) における延べページ数である。
 1925年 *Fragment d'un Descartes* (5)
 1926年 *Le retour de Hollande* (10)
 1937年 *Descartes* (18)
 1941年 *Une vue de Descartes* (32)
 1943年 *Seconde vue de Descartes* (2)
- (6) ヴァレリーがドガを個人的に知ったのは『テスト氏との一夜』執筆後のことであるが、彼はドガに出会う前にすでにきわめてテスト氏的なドガの姿を勝手に想像していたようである。(Cf. Notes par Jean Hytier à M. Teste, Paul Valéry, *Œuvres*, T.2, Pléiade, P.1384.)
 また、ドガの拒絶に関しては、同書 P.1386参照。
- (7) Cf. A. Livni, *La recherche du Dieu chez Paul Valéry*, Klincksieck, PP.47-48.
- (8) ヴァレリーの著作集 (Valéry, *Œuvres*, Tome I et Tome II, Pléiade) からの引用に関しては、例えばその Tome I, P.857 の場合、引用文のあとに (I, 857) という風に巻、ページを略記する。
- (9) Descartes, *Discours de la méthode*, *Œuvres de Descartes*, VI, C.N.R.S., P.7.
- (10) *Ibid.*, P.11.
- (11) *Ibid.*, PP.16-17.
- (12) いくつかの例を挙げておこう。
 (i) 音楽家は詩人とはちがひ音楽独自の材料をもっているということと、楽音と雑音の相違について。 *Poésie et pensée abstraite* (I, 1327) と *Propos sur la poésie* (I, 1367)。
 (ii) 歩行とダンスの関係は散文と韻文の関係に対応するということについて。同じく、 *Poésie et pensée abstraite* (I, 1329) と *Propos sur la poésie* (I, 1370)。
 (iii) *Discours en l'honneur de Goethe* (I, 531-553) と *Goethe* (Valéry, *Vues*, La Table Ronde, PP.139-157) におけるいくつかの箇所。
- (13) Valéry, *Cahiers*, T.25, P.584.
- (14) *Ibid.*, T.26, P.329.
- (15) *Ibid.*, T.22, P.370.

- (16) *Ibid.*, T.24, PP.796-797.
- (17) A. Baillet, *La vie de Monsieur Descartes*, Tome 1, P.131.
- (18) *Ibid.*, T.1, P.177.
- (19) *Ibid.*, T.1, P.42.
- (20) *Ibid.*, T.1, P.42.
- (21) Cf. Descartes, *Discours de la méthode*, Œuvres, VI, P.67.
- (22) アラン (Alain) もデカルトの武人的性格に脚光をあて、二つのエピソードを紹介したあと、『方法叙説』の中の「森に迷いこんだ旅人」(Descartes, *Discours de la méthode*, Œuvres, VI, P.24) の比喩にデカルトの断固たる決断力を読みとろうとする。「森林の中に道を失ったデカルトは、この道よりもかの道を取るべき何らの理由も覚知しない。しかもデカルトは選び、自ら選んだものが最も理性にかなっているかのように、選んだものに固執し、またこの決意の堅さと辛抱の強さによって、実行における自己に対するこの忠実さによって、偶然の選択を救い、これをよきものとするのである。」(桑原武夫・野田又夫訳、『デカルト』、みすず書房、P.11。なお、われわれは原文にあたることができなかったので、訳文をそのまま借用する。)
- (23) Descartes, *Discours de la méthode*, Œuvres, VI, P.4.
- (24) *Ibid.*, P.4.
- (25) Valéry, *Cahiers*, T.10, P.359.
- (26) *Ibid.*, T.5, P.144.

(付記)

- 1 引用文中の強調(傍点)部分は原文ではイタリックあるいはゴチック体で書かれている部分である。
- 2 訳文は原則として拙訳を用いたが、数多くの既訳書、とりわけ『ヴァレリー全集』(筑摩書房)、粟津則雄訳『テスト氏』(現代思潮社)、世界の名著第27巻『デカルト』(中央公論社)、バイエ著・井沢義雄・井上庄七訳『デカルト伝』(講談社)等には訳語の選定等に際して教えられるところが多くあった。

A propos du Descartes pour Valéry et de Monsieur Teste

Satoru YAMAMOTO

Chez Valéry qui a inscrit, comme une épigraphe à *La Soirée avec Monsieur Teste*, «Vita Cartesii est simplicissima...», son idole intellectuelle M. Teste s'identifie avec Descartes. Valéry raconte son Moi le plus librement quand il parle de M. Teste ou de Descartes.

Après la publication des quatre œuvres sur M. Teste en 1924 et en 1925, Valéry n'écrit sur M. Teste que quelques petits fragments posthumes. Au contraire, en 1937, en 1941, et en 1943 il écrit ses principales œuvres sur Descartes. On peut supposer que l'intérêt valéryen passe de M. Teste à Descartes vers l'année 1925. Les deux œuvres écrites à cette époque, *Lettre d'un ami* et *Le retour de Hollande* nous montrent bien que l'image valéryenne de Descartes est presque identique à celle de M. Teste. Dans *Lettre d'un ami*, un des amis de M. Teste, sur le retour à Paris, parle de la modification de son esprit. De même, dans *Le retour de Hollande*, Valéry rêve de Hollande où vivait jadis Descartes une vie quasi idéale, et que Valéry a quitté tout à l'heure.

Plus tard, la lecture de *La vie de Monsieur Descartes* de Baillet aidant, Valéry parvient, il nous semble, à considérer la conversion intellectuelle de Descartes comme la sienne, et il parle comme s'il était Descartes lui-même.

Nous prenons ses œuvres sur M. Teste et sur Descartes pour une sorte de son autobiographie qu'il a insisté à écrire dans sa lettre à Gide en 1894 où M. Teste commençait à naître. Pour atteindre cette conclusion, nous commençons par examiner la conception valéryenne envers Descartes, et ensuite nous analysons quelques points communs à M. Teste et à Descartes. L'égotisme ou la conscience de soi sera le mot-clé.